

ヒール宮井の アグリテクニカ 訪問記

本誌コラムでおなじみの宮井能雅氏ら一行は昨年11月、ドイツで開かれる世界最大の農業機械展であるアグリテクニカに訪問した。そこで見たことや感じたことを寄稿してくれた。 写真・文/宮井能雅



1

- 1 会場前での記念撮影。
- 2 マスカーの播種機の性能はどうなのだろうか。
- 3 サルキーの人気はこんな感じです。



2



3



4



5



6

- 4 マルチな作業機の展示は以前よりも減ったような。
- 5 けん引バーではなく、ロアーリンクでけん引するローラーは初めて見る。
- 6 チゼルプラウの先端からツイストするのは世界の常識だ。

ハノーバーで開かれるこの農機展には6回くらい訪れたことになる。もう、車はどこに駐車して、どこから入り、どこにどんなランチがあるのかはしっかり熟知している。パンフレット小僧にはなりたくないの手ぶらでゴード。

初日は小物中心に探索して、残り2日で大物を目指すことになる。とはいえ、小物と侮ってはいけない。機械の単なるパーツとしての役割ではなく、最先端技術の塊でもあるからだ。その小物の製品は先進国のみならず、アジアや東欧諸国のアイデアもふんだんに展示されている。一方、ジョン・ディア、ケース、ニューホランドなどの大手ブランドは間違いなく混んでいるので全部の製品を見ずに、新型を中心に記入ことになる。毎回訪れるたびに大型になっていくのはわかるが、現実の現場であるドイツ辺りの農場では北海道とさして変わらないサイズの機種が主流だ。ただ、フランスの一部や東欧ではドイツの平均の2〜3倍規模の生産者が普通に存在する。生産者の平均年齢も日本より明らかに若い。つまり、ハイテク機械を使いこなせることになる。たとえば、画面でエンジン回転と速度を設定しておけば、土壌の硬さが違ってハイテク・エンジンは音だけ変わってエンジン回転や速度は変



7 レリーのペーラーは初めて見る。8 同じくレリーの自走式のフォレージハーベスター。9 とりあえずでかいマニュアルスプレッダー。



10 このコンパクトで3,500kg仕様のリフトはすごい! 11 サイドパネルがないのが気になる除雪ブローアー。12 シートも数多あるということか。13 接地面が4倍になるタイヤは2年後がめどらしい。



14 15 16 パキスタン、中国、スロバキアからの出展があった。17 18 北海道からはIHスターとサンエイ工業が出展していた。

わからない優れた物だということは理論ではわかっていても、50過ぎの日本人でタッチパネルを使いこなせるオヤジはどれくらいいるだろうか。

話は変わるが、筆者が操縦するセスナ172型は最低18個プラス無線関係で7個の計器を見ながら操縦する。しかし、オプションのボーイング787並みのグラス・コクピット、つまり一つの画面ですべての状況が理解できて、20カ所も目を移動させなくてもいいことになっている装備が主流になってきている。初めてこのグラス・コクピット式を操縦したとき、教官に「これってみんな理解できるんですか?」と聞いたところ、「若い子はみんなゲーム機に慣れてるので早く慣れますね」と言われ、なぜか寂しく老いを感じてしまったことがある。そうなるとアメリカのようにコンバインやスプレッダーにはオート・ステアが当たり前で、もしかしたらHUD(ヘッドアップ・ディスプレイ)が標準装備時代も見てくる。あるトラクター会社の展示会で自動操縦のデモを行なった際、アルバイトで来ていたフリーアナウンサーのてつやが「これで人手不足の地域でも自動で畑作業をしてくれますね」と言ったが、このような高価な機械を買い求めるのは投資できる賢くて若い生産者だけである。(つづく)